

▲写真奥は無花粉スギ、手前が無花粉ヒノキ（令和元年7月の状況）

▲無花粉ヒノキ苗木（令和元年7月の状況）

目次

- 地域の話 秦野市立北小学校森林体験学習…………… 2
- 第18回やどりき水源林のつどいを開催しました！…………… 3
- 2019年度「丹沢大山自然再生活動報告会」開催…………… 4
- ウッドデザイン賞2019 堀内ウッドクラフトさんが優秀賞（林野庁長官賞）を受賞しました！… 5
- 父子二代 山の恵み 原木乾しいたけを届け続ける…………… 6
- 森の輪 ～にぎわいのある森の再生を目指して～…………… 7
- 木材共販市況…………… 8
- 林業・木材産業改善資金のご案内…………… 8
- 表紙の写真について…………… 8





地域の話

秦野市立北小学校森林体験学習

秦野市立北小学校では、毎年、6年生児童が森林体験学習を行っています。令和元年11月29日（金）には、間伐作業と、間伐材を丸太切りするコースター作りの体験が行われ、湘南地域県政総合センター農政部森林課は間伐作業について指導を行いました。

当日は、秦野市環境産業部環境共生課の協力のもと、秦野市森林組合、地元の菩提生産森林組合、羽根生産森林組合、戸川三屋生産森林組合、北財産区議会議員、当課職員が指導者となり、班ごとに分かれて、間伐しました。



▲間伐作業時の様子

伐採木は胸高直径が10cm～15cm程度のヒノキで、1班7～8人で協力し、交代しながらのこぎりで伐り



▲丸太切りの様子



▲輪切りしたコースター

進めました。思っている以上に木は高さがあり、倒れると迫力があるため、伐り倒した際には歓声があがっていました。

丸太切りでは、班で協力して間伐材を支えて作業する姿が見られました。

最初は上手く使えなかったのこぎりも、すぐに上達し、たくさんのコースターをお土産にできました。児童からは、「いいにおいがする」、(年輪を数えて)「自分と同じ年だ」、「楽しい」などの感想がありました。

今回間伐した木は幼齢林から同小学校児童による手入れが行われています。指導者の中には同小学校卒業生で、かつて、下草刈りをしたという方もいらっしゃいました。

体験学習には、保護者の方々が、用具の配布や使用後の手入れを行っているほか、地域のいろいろな方々が関わっています。



▲保護者のお手伝いの様子

教頭先生からは、6年生が行う伝統がある体験学習であり、今の5年生にも引き継いで、今後も続けていきたいとお話がありました。

こうした体験学習で、代々、児童らが、下草刈りや間伐などをして育ててきた木は、見事に生長し、東京2020オリンピック・パラリンピックの選手村「ビレッジプラザ」の建設に使われることになりました。令和元年10月15日（火）には、児童に見送られ、提供する6㎡ほどの木材の出発式が行われました。



▲出発式の様子

森林づくりは時を要します。これからも、伝統を引き継いで、森林体験学習を続けていただけたらと思います。（湘南地域県政総合センター農政部森林課）



第18回やどりき水源林のつどいを 開催しました!

令和元年8月3日(土)、足柄上郡松田町^{やどりき}寄にある「やどりき水源林」において、「第18回やどりき水源林のつどい」を開催しました。

当日は天候にも恵まれ、250名を超える参加者が水源林でのひと時を過ごしました。

「やどりき水源林のつどい」とは、県民の皆様や、県が進める水源の森林づくりに協同で取り組む「森林再生パートナー※」等の団体の皆様とともに水源林トレッキングや水生生物観察、森林交流会等を通じて水源の森林づくりへの理解を深めていただくために、毎年実施しているイベントです。

※森林再生パートナー：寄附や森林活動により、県の森林行政の推進にご協力いただいている企業・団体

○水源林トレッキング

「周遊道Bコース」「林道コース」「成長の森コース」の3つのコースから、参加者が希望のコースを選び、森林インストラクターによる水源の森林づくりの説明を受けながら、森林浴を楽しみました。



▲成長の森コース

○水生生物観察

森林インストラクターと一緒に、水源林の川に住む生き物を観察しました。



▲水生生物観察

○森のコンサート

お昼時には、虫沢田代祭囃子保存会による森のコンサートが行われました。息の合った演奏に、会場は盛り上がりました。



▲虫沢田代祭囃子保存会による演奏

○森林交流会

森林再生パートナー・定着型ボランティアPRブース、ウッドカー、丸太切り、クラフト作り、草笛、キットを用いた水源涵養機能の説明など楽しく学べるイベントだけでなく、スイカ割り、鹿シチュー、地元野菜の販売、「森林再生パートナー」であるキリンホールディングス株式会社による清涼飲料水の提供、神奈川県内広域水道企業団による水道水が届くまでの仕組みの紹介と水缶「やまなみの雫」の提供などが行われました。



▲キットを用いた水源涵養機能の説明

○やどりき水源林のつどい参加者の声

参加者アンケート結果では、「水源の森林づくりや森林について理解が深まりましたか」という質問に対し、「初めて知った・理解が深まった」という回答が9割を超えました。また、「川の風、周囲のみどりに癒やされました」などの声をいただき、多くの方に水源林に親しんでいただくことができました。

(環境農政局緑政部水源環境保全課水源の森林推進グループ)



2019年度 「丹沢大山自然再生 活動報告会」開催



令和元年12月14日（土）に、日本大学生物資源科学部において、2019年度丹沢大山自然再生活動報告会（以下、「活動報告会」という。）が、300人を超える参加をいただき、盛大に開催されました。

神奈川県が平成19年に丹沢大山自然再生計画を策定し、丹沢大山の自然再生に向けた取組を本格的にスタートさせてから、15年近くの年月が経とうとしています。5年を1期とするこの計画も第3期に入り、その3年目にあたる今年は、今期計画の進捗管理や評価を行い、次期計画に向けた検討を始める重要な時期と言えます。

そこで、今回の活動報告会では、「神奈川県の自然再生15年の取組により見えてきたこと」をテーマに掲げ、これまでの活動を振り返るとともに、県による具体的な取組や、その成果などについて、「基調講演」と「ポスターセッション」、「シンポジウム」形式による報告を行い、最後の「総合討論」での質疑や意見交換を通し、次期計画に向けた取組の推進につなげていくこととしました。

【基調講演】

基調講演は、丹沢大山自然再生委員会（以下、「再生委員会」という。）と、県自然環境保全センター（以下、「保全センター」という。）が、それぞれ報告を行いました。まず、再生委員会からは、丹沢の自然環境悪化の原因を探るために始まった、2度にわたる総合調査から現在に至るまでの経緯や取組、今後の課題について説明があり、保全センターからは、県における森林施策の変遷と、自然再生のための8つの特定課題の解決を目指す事業について説明しました。

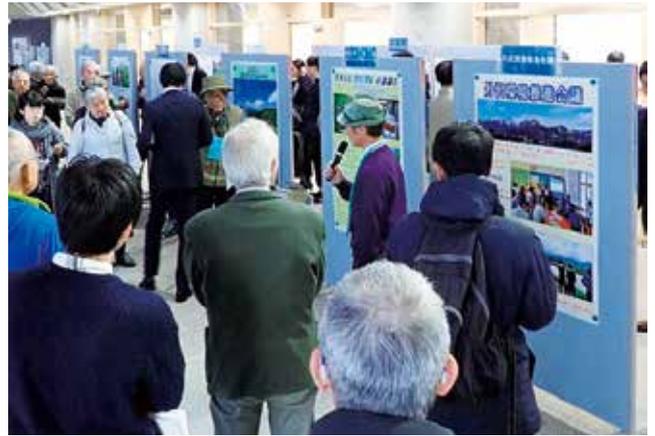


▲基調講演の様子

【ポスターセッション】

今回ご参加いただいた市民や、大学、団体等は11組で、ポスター数は22枚となりました。来場者と発表者

が意見交換をするコアタイムは、12時45分から14時までと限られた時間でしたが、それぞれのポスターの前では、活発な議論が交わされていました。



▲ポスターセッションの様子

【シンポジウム】

8つの特定課題の解決を目指す県の取組の中から、「シカ保護管理」「自然林の土壤保全対策」「人工林管理」について、取組内容と成果、今後の課題等、県から次のとおり報告しました。

- ・シカ保護管理：管理捕獲を継続して行った場所では、シカ密度の低下傾向、林床植生の回復がみられるが、依然として密度が高く、植生が回復しない場所もあるため、これまでの実施状況を検証して今後の取組を検討する必要がある。

- ・自然林の土壤保全対策：土壤保全の総合的な対策や工法を試験施工等により模索し、現在は効果の認められる植生保護柵と金網筋工、構造階段を主軸に、林床植生の回復を図っている。

- ・人工林管理：道から遠い人工林では広葉樹と混じる混交林への誘導を進め、道から近い人工林では木材の有効活用をしながら継続的な人工林管理を進めるとし、事業に取り組んできた。その結果、平成15年度では手入れ不足の人工林の割合が6割あったのが、平成27年度は2割まで減少した。県有林においても施策に則り、道からの距離に応じた施業を行うほか、土壤保全対策にも取り組んでいる。

【総合討論】

基調講演やポスターセッション、シンポジウムで報告された内容を通して出された来場者からの質問、意見に対し、回答する形で進めました。

頂いたご意見等は、今後の丹沢大山自然再生に向けた取組の推進に生かしたいと考えています。

なお、当日の基調講演等の発表要旨は再生委員会HPからご覧いただけますので、ご興味のある方は、是非ご利用ください。

☆丹沢大山自然再生委員会HPはこちらです

<https://www.tanzawasaisei.jp/reports2019.html>

（自然環境保全センター研究企画部自然再生企画課）



ウッドデザイン賞 2019

堀内ウッドクラフトさんが優秀賞 (林野庁長官賞)を受賞しました！



受賞作品「ふればらウッド」

ウッドデザイン賞とは、木の良さや価値を再発見させる製品や取組について、特に優れたものを消費者目線で評価し、表彰する制度です。

審査を通過して「ウッドデザイン賞」に入賞した作品の中から、最終審査により最優秀賞、優秀賞、奨励賞、特別賞が選出されますが、今年は堀内ウッドクラフト(足柄上郡大井町)の堀内良一さんが、みごと優秀賞を受賞されました。

令和元年12月5日(木)に「エコプロ2019」の会場(東京ビッグサイト)において、ウッドデザイン賞の表彰式が行われました。



▲表彰式の様子(左から2人目が堀内さん)

受賞作品の「ふればらウッド」は、主に病院で子どもに検査などの説明をする際に使う木製玩具です。

CTやMRIといった金属やプラスチックの冷たい質感の医療機器に子どもは恐怖感を抱きますが、木製の模型を使い説明することで安心感を与え、納得して検査や治療を受けることができます。既に国内100以上の医療関係施設に納入したそうです。

作品評では『温かみのある木を採用している点が優れている。個々のづくりも非常に丁寧で、開発者の思いが伝わる製品である。』と評価されています。

これからの活動について堀内さんは「今後は県内の川上から川下のネットワーク構築の組織作りを行いたいと考えています。色々な立場の関係者の連携で新たなプロジェクトなどが増え県産材の需要増になるのではとの思いです。」と話しておられました。

これまでにない発想の木製品が新たに生み出されることを期待しています。

「森林認証 勉強会」の開催

堀内ウッドクラフトの特色の一つは、FSC®森林認証制度のCoC認証を取得されていることです。(CoCはChain of Custodyの略で、製材所、工場、加工現場が取得する認証です。)

堀内さんは木材の合法性を確保するためには、世界基準の森林認証が必要という信念をお持ちです。

制度が広がるためには、まず知ってもらいたい、ということで、森林認証を実践されているグループ「F-net大井川」の代表である森林組合おおいがわ 杉山組合長を講師に招いての勉強会を企画されました。(当センターと共催)



▲森林認証勉強会の様子

令和元年9月13日(金)に足柄上合同庁舎で開催された勉強会は多数の方にご出席いただき、講師への質疑応答も多く、盛況のうちに幕を閉じました。

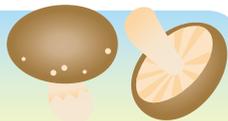
県内ではまだ取得している団体が少ない森林認証ですが、林業関係者の関心は高く、制度の理解を深める良い機会となりました。

堀内さんの製品づくりや活動が川上・川下の両方に広がることで、森林整備と木材利用の好循環の促進につながることを願っています。

(県西地域県政総合センター森林部森林保全課)



父子二代 山の恵み 原木乾しいたけを届け続ける



豊かな森林の生態系の循環を利用し、できるだけ自然に近い状態で栽培される原木の乾しいたけは、保存食として昔から日本の食卓で重宝されてきた、林産物です。乾しいたけは、冬菇(どんこ)や香信(こうしん)など、収穫した時の状態によって分類されます。その中でも、真冬の時期にじっくり時間をかけて育った生しいたけを乾燥させて作られる花冬菇(はなどんこ)は、傘が白く割れ、肉厚で形の整ったものをいい、冬菇の中でも1%も取れない貴重品で、最高級品とされています。



▲花冬菇の乾しいたけ

写真は、その花冬菇の乾しいたけです。白く花のようなひび割れが美しく、品質のとても優れたこの乾しいたけは、なんと神奈川県内で生産されたものです。全国の冬菇生産量の約8割は一大産地である大分県や宮崎県といった九州地方、次いで静岡県、岩手県と、いずれも山林面積が広く林業やしいたけ栽培が盛んな地域です。都市部に近く、しいたけ生産量がとても少ない神奈川県においても、このような高品質の花冬菇を作る生産者がいることをご存知でしょうか。

相模原市緑区牧野の旧藤野町の山間、広葉樹の森林に囲まれた場所に、原木乾しいたけ生産者の黒木工くろきたくみさんの作業場とほだ場があります。黒木さんは、県内で唯一の本格的な乾しいたけ生産者です。黒木さんの作る地元のクヌギやコナラの原木栽培で作られた乾しいたけは、肉厚で大きく、味も抜群で、多くのリピーターがいます。林内自然ほだ場で原木栽培で、菌の品種を厳選し、気象条件とほだ木やしいたけの状態を見極めて、生しいたけの段階でひとつひとつ袋かけをして肉厚に仕上げるなど、安全でおいしい高品質な乾しいたけ用のしいたけ生産を、この地域で50年以上続けています。

黒木さんは宮崎県出身。鉈目栽培(注)の頃からしいたけ生産を行っており、牧野地域の豊富なしいたけ原木資源である広葉樹に着目し、一家で移住し、昭和45年からこの地域で本格的に生産を始めました。地域のしいたけ

生産者の組合であった藤野椎茸生産組合の組合長や、農協等が主催するしいたけ植菌教室の講師、地域の社会福祉施設で入所者に栽培技術を指導するなど、幅広く技術の普及や後継者の育成に取り組み、県の林業普及指導協力員(指導林家)としても活動されています。



▲林内に伏せ込まれた原木



▲肉厚なしいたけ

来年90歳を迎える現在も、御子息の竜郎たつろうさんと、地元の広葉樹資源を活かした原木しいたけ生産に情熱を持って取り組まれています。来年の春に竜郎さんが使う原木は、30年前に黒木さんが伐採し、萌芽更新で育ったコナラの木です。



▲黒木工さん(左)と黒木竜郎さん(右)

「この神奈川の牧野地域で、地元の木を使ってこんなに質の良い乾しいたけができるといういうことを、もっとたくさんの人に知ってほしい。」と、熱く語ってくださった黒木さん。地域の広葉樹林が活用され、若返り、生き生きとした活力のある山となり、原木しいたけと共に将来に続いていくことを願っています。

(注) 原木に鉈で傷をつけ(鉈目)、自然界に浮遊しているしいたけ胞子が鉈目に付着するのを待つ栽培方法

(県央地域県政総合センター農政部森林保全課)



森の輪

~にぎわいのある森の再生を目指して~

阿部倉山の森保全の会 荒井直彦さん(61)

阿部倉山は、葉山町の北部にある標高161mの山です。頂上付近からは、相模湾越しに江ノ島、富士山を望み、季節によっては富士山の頂上に夕日が沈む、「ダイヤモンド富士」を見ることができます。

この阿部倉山で森林の整備を行っている「阿部倉山の森保全の会」の事務局を担当されている荒井直彦さんにお話を伺いました。

活動の発端は？

私が小学校1年の時に葉山に戻りました。当時は祖父と散歩に行こうと言われ、よく山に連れて行ってもらう事がありました。興味を持ったのは、平成27年ごろ、父から枯れている杉を伐ってくれと言われ、兄と私と友人たちと処理をしているうちに、山の手入れもやってみようということになり、1年目は父の山の手入れから始めて、2年目は親戚の所有の山にも広げ、近隣の地権者にも声をかけたのが活動の始まりです。

阿部倉山の山頂付近は、昔は、カヤ場や畑として利用されていて、頂上からソリを使って屋根ふき用のカヤをおろしたという話を聞いています。

カヤが使われなくなってから植林がされています。今から60年位、昔のことです。ほとんどがスギでしたが、頂上付近にはオオシマザクラが植わっています。薪として使う目的だったと思いますが、このあたりの山はほとんどはげ山だったそうです。

一時は熱心に植林され、手入れもされていたのですが、しだいに利用されない山となり、私たちが活動に入る前は、アズマネザザやアオキの藪が茂って見通しもきかない状態でした。

これまでの歩み

平成27年7月に、私の兄弟や友人知人、親戚、近隣住民が集まって、「阿部倉山の森 保全の会」を結成し、2年をかけて、山道を切り開き、藪の刈払い、倒木の

処理を行いました。1年目で山頂までたどりつきましたが、眺望はなく、「富士山や相模湾が一望できる美しい山を取り戻そう」という新たな目標が生まれました。そして、スギ林は美しい景観となり、山頂のオオシマザクラの林からは相模湾や富士山が望めるようになりました。

3年目の平成29年には、地域の親子を招き、第1回目の桜100本の植樹会を開催し、翌年にも2回目を実施しています。もともとあったオオシマザクラとあわせて、皆様に親しまれる葉山の桜の名所になればと思っています。

支援制度の利用

活動に必要なチェーンソーや刈払い機などの機材の購入には、林野庁の「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」を平成27年から3年間活用しました。

平成29年度には、切り開いた山道を走行できる運搬機をセブンイレブン記念財団から寄付していただき、会員の負担が軽減しました。

ところが、令和元年の台風15号と19号では、阿部倉山でも甚大な被害が発生してしまい、100本以上の木が倒れ、ところによっては、一般の人が立ち入るには危険な状態になっています。こんな現状を担当者に相談したところ、特例措置として被害の復旧を目的とした「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」の追加申請が可能となり、申請したところ採択され、今後3年間で、再生する計画を立てました。最初の2年間は、倒木の調査と処理を行い、3年後には再び植樹会を開催したいと思っています。

今後の課題と目標

スギも桜も植えてから60年を超え、大木となっています。スギ林はもっと間伐をしたいのですが、ボランティア活動で伐採するには危険な太さとなり、今後の課題となっています。

阿部倉山は、行幸啓道路でもある逗葉新道の出口の要所に位置し、言わば湘南地域の玄関口にあたります。阿部倉山が地域住民にも、遠方から来訪される方々にも親しまれる山になっていくことが、私たちの願いです。

(横須賀三浦地域県政総合センター地域農政推進課)



▲会員手づくりの案内板



▲手入れ後のスギ林



木材共販市況

県森連林業センターでは、11月14日（木）に6ヶ月ぶりとなる市の開催をしました。

入荷状況ですが、7月は1,338㎡、8月は1,549㎡、9月は1,656㎡、10月は1,366㎡、11月は1,797㎡と、第1四半期は低迷していた入荷が、第2四半期から回復しました。

販売状況は、スギ・ヒノキ共に柱・土台・桁の主要部材及びヒノキの中目材に県内・県外の業者から注文が入っているほか、少量ですが、スギの中目材にも注文があり、売れ行きは好調となっていますが、たび重なる

台風による林道被害等が発生した影響により、入荷が減少したため需要に対して供給不足となっています。

相場は、入荷量の減少による品薄感から強含みの傾向となっています。

今後は年度末に向け、組合・国・県・事業者からの出材が集中することが想定されますので、出来るだけ早めの出材をお願いします。

また、出材前に連絡を頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

令和元年11月14日

スギ						ヒノキ							
長さ (m)	末口径 (cm)	価格 1㎡当たり (円)			気配	摘要	長さ (m)	末口径 (cm)	価格 1㎡当たり (円)			気配	摘要
		高値	中値	安値					高値	中値	安値		
3.0	14	11,000	9,000	4,000	○	柱 目 3.5寸	3.0	30~	25,000	10,000	5,000	○	元 玉
	16~18	12,000	11,000	5,000	○	柱 目 4寸		14	15,000	13,000	8,000	○	柱 目 3.5寸
	20~	12,000	11,000	5,000	○	中 目		16~18	18,500	17,000	14,000	○	〃 4寸
								20~22	18,500	17,000	14,000	○	中 目
						24~28		18,000	16,000	13,000	○	〃	
4.0	11~13	10,000	8,000	4,500	○	母屋取り	4.0	30~	20,000	15,500	13,000	○	元玉選木
	14	10,000	9,000	6,000	○	桁 目 3.5寸		11~13	10,000	9,000	8,000	○	母屋取り
	16~18	12,000	10,000	6,000	○	〃 4寸		14	16,500	14,000	9,000	○	土台目 3.5寸
	20~22	12,000	10,000	6,000	○	中 目		16~18	17,500	16,500	10,000	○	〃 4寸
	24~28	13,000	12,000	6,000	○	〃		20~22	17,500	16,500	11,000	○	中 目
	30~	13,000	12,000	6,000	○	〃		24~28	17,920	15,000	11,000	○	〃
30~	15,000	13,000	8,000	○	元玉選木	30~		25,000	16,000	12,000	○	〃	
6.0	16~18					通し柱 4寸		6.0	30~	30,000	25,000	15,000	○
	20~22					〃 5寸	16~18		35,000	25,000	20,000	○	通し柱 4寸
								20~22	35,000	25,000	20,000	○	〃 5寸

主要素材 (1㎡) 当たり △強気配 ○保合 ▼弱気配 最新の情報は神奈川県森連ホームページにてご覧ください。 URL <http://www.kenmoriren.jp/>

林業・木材産業改善資金のご案内

林業・木材産業改善資金は、新しい事業を始める、機械や設備を充実させるなど、さまざまな事業計画をサポートする「無利子」の資金です。ご興味を持たれた方は、是非お近くの下記事務所までご相談ください。

■問合せ・申込先

- ・横浜川崎地区農政事務所
- ・各地域県政総合センター

対 象 者：林業従事者、木材産業者

貸付事例：高性能林業機械や木材乾燥機等の購入

貸付期間：10年以内（導入した施設の耐用年数以内）

返済方法：均等年賦支払

限 度 額：個人 1,500万円 会社 3,000万円

利 息：無利子

保 証 人：1～2名

※申込書提出期限は年4回（5月7日、7月7日、10月7日、1月7日）（やむを得ない事情により変更可能）



表紙の写真について／全国で初めて無花粉ヒノキの苗木生産を開始しました！

本県では、花粉発生源対策に20年以上取り組んでおり、花粉の少ない苗木の生産を目指してきた現在では、スギ・ヒノキの苗木は花粉の少ない品種へと転換しています。スギでは、無花粉苗木の生産も行われ、これら花粉対策苗木の増産に向けて今も課題解決に取り組んでいます。平成25年に、本県職員により全国で初の無花粉ヒノキが発見された事を機に、ヒノキの無花粉苗木の生産に向けた取組を進めてきましたが、県自然環境保全センター研究員の努力により、平成30年7月に無花粉ヒノキの品種登録が出願され、令和元年5月から横浜市内の苗木生産者の苗畑でコンテナでの挿し木による育苗が開始されました。試験的な取組が始まったばかりで、生産技術の確立等に向けて今後も試行錯誤と努力を重ねていくことになると思いますが、林業種苗への期待が大きく膨らみます。（横浜川崎地区農政事務所 地域農政推進課）